
何かのために、誰かのために ~証~

飛亜乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何かのために、誰かのために（証）

【Zコード】

Z0752Y

【作者名】

飛亞乃

【あらすじ】

ある日、突然強引にA P T X 4 8 6 9の解毒剤を要求するコナン。その時に浮かべた違和の残る微笑みをきっかけに、彼の暗闇は幕を開けた。誰も、想像すらできないその理由とは何なのか…？

1人で2人。その事実はいざれ……。

ベースは、コナンです。新一は度々出てきはしますが、飛亞乃の小説は主に小さな探偵君が主になります。シリアルズです。よかつたら、ご覧ください。

解毒剤（前書き）

連載です。

久々の新作になりました。
また、不定期的更新になりますが、申し訳ありません。
よろしくお願いします。

解毒剤

『そんな、強い人間だと思つてんの?』

ただ耳の奥に「びつづく」、彼らしくもない自嘲めいた声。

本氣で、彼が偽物なのではないかと疑つた。

それを否定してしまつたから……

彼は、本当のフュイクを身につけてしまつたのかもしれない。

「だーかーらー。解毒剤の試作品、くれつて言つてんだよ」

目の前でモノをよがるよがる、ぶんぶんと手を振り、何度も同じことを繰り返す。

「しつこいわね、黙目つて言つてるでしょ?」

「んでだよ、万が一のために無いと色々と不便なんだよ、分かるだろ」

何が、分かるだろ、なのだろつか。

…受け入れられるわけがない。

小さな科学者は、盛大なため息を吐いた。

「あのねえ、あなた忘れかけてんじゃないの? アポトキシン4869は、とんでもない毒薬なのよ。そんな薬の解毒剤をホイホイ渡すわけないでしょ」

「それだから、万が一の時だけって言つてんじゃねえかよ」

「あなたの万が一って、日常茶飯事になりかねないじゃない。乱用なんてしてみなさいよ、死んじゃうわよ、あなた」

脅しでもなんでもない、本氣の忠告だった。

さすがに、「ナンも黙り込む。

「……3錠は?」

「まだ欲しがる気?」

怒氣を含んだ息を吐きながら、睨んでみたものの、確かに少しだけ気になることがある。

こんなじつに、解毒剤をよがるなんて、今までなかつた。

ひょっとしたら、本当に何かがあるのでうか。聞いてみよつと思つた。

「そんなに欲しがる…理由があるわけ?」

「…まあ……言えないんだけどな

そうじつて、スッと視線を逸らした。

理由が言えないだなんて、どうこういつもりかしい。やはり、彼女が
らみ? それとも……

事件だらうか。

「…一応、聞いとくけど、あなたそんな解毒剤要求してくるけど、
体の負担、耐えられるの?」

「え…ああ……。確かに、きつこいつちゃきつこいけど、そんなでもね
えよ。つつか、そんなこと聞いてくるつことは、くれんの?」

「2錠だけね。ただし、継続時間とかまだよく分からぬから気を
つけて」

サンキュウと言つて、それを受け取つた彼は、微笑み、錠剤を握り
こんだ。

……これから、行つことのために……。

何者なのか…何を纏つかのか…（前書き）

今回は、今までにならないタイプの小説の綴り方、していきたいと思います。

感想をくださいの方、ありがとうございます。

何者なのか…何を隠すのか…

阿笠邸を出て歩いていたはいいものの、2錠しか貰えなかつたのは、少し痛い。

…………足つるだらうか。

どう、やりくりすりや いいかなあ…………。

ふと、スニーカーの先端に視線を当ててみた。

今から、俺自身がすることの真意を知つてゐるものは誰もいない。

誰一人、本当のことを知らない。

俺だけが、俺だけが、知つていること。

確か、持続時間分からねえんだつたなあ。

過去にあつたのは、24時間とか、4時間とか…それくらいは持つたな。

ギュッと、ポロシャツを掴んで、大きく息を吐いた。

瞳を、伏せはしない。

伏せたら、また鮮明に、甦る。

そう…。誰も知らない、誰にも言えない。

たつた一つの事の終末までの、幕。

それを今、開こう。

眩しそぎて、見つめることのできない太陽が、背中を突き刺していく。

そこから零れる影に、笑顔を隠してしまつよつに、真実」と覆い隠してもらおうか。

決して、後ろだけは振り返らないように、ゆっくり、ゆっくり、歩きだした。

「あーあ。コナン君、まだどうか行っちゃったあ

居間の机に頬杖をつきながら、さりとてしたロングヘアを指で弄んだ。

退屈のあまり、明るい笑い声を発す箱をよそ、ため息をついてしまつ。

『蘭姉ちやん、行つてくるね』

なんて、笑顔振りまいて行つちやつたけど、せつかくの休み、一緒に過ごしたかつたな。

それに、ここ一週間、コナン君家にいなし。

毎日毎日、夜遅いし、週に3泊は、博士の家でしたような。

なんなかしら、ホント。

もつ一度、溜息を吐くと、蘭は立ち上がつた。

ふと、机の下に小説を見つける。

「これ…コナン君のかな。…うわあー…」

開いた瞬間、推理小説だと分かつた。

こんな小説ばつか、よく読めるなあ。ずりゅりと並んでいるのは、細かい文字。

ていうか、分厚い…。普通、こんな小学生が読まないよねと苦笑してしまつ。

でも、きっと彼は普通じゃない。

あんな小さな子供が、あんな大きな包容力を持つてる。

いいところ上げていつたら、キリがないし…。

ほんと、新一にそつくりなんだから…。

でも、本当に、「コナン君は…何者なんだら?」。

「あのー…佐藤さん。コナン君って、何者なんでしょう」?」

今日は珍しく取った休暇。久々に誰にも邪魔されず、一人ゆっくりできていた。

視線を運転手に這わせ、眼を見開いた。

「あらなあに?」こんな日に、堅苦しい会話ね

「すみません…。でも僕、ずっと気になつてるんですよ」

異様に真面目な高木の顔に、美和子も眉を寄せた。

「確かに変わった子よねえ。事件現場に遭遇しても、全然怖がらないし…、頭良すぎだし」

「でしょ?」

高木は、前の道路を見つめながらも、あの日のことを思い出していた。

東都タワー。ド真ん中のエレベーター。時限爆弾。1200万人の
人質。水銀レバー。

その爆弾を次々に解体していった。

そこに唐突に現れた悪魔の言葉……。

『勇敢なる警察官よ……。君の勇気を称えて褒美を与えよう。試合終了を彩る大きな花火の在り処を……。表示するのは爆発3秒前・健闘を祈る』

あの3秒間で、彼は答えを導き出した。

普通なら、怖がるだろ？ 爆弾だなんて、それで死ぬだなんて……、嫌だつたろ？

それなのに彼は……。

あれから「ナン君は、ただ者ではないと認識した。

そして、彼は言った。

「いるかもしないんだ……そこに……この世で一番死なせたくない大切な奴が……」

だから、問いつしまった。

何者などと、君は、一体何者であるのか。知りたくてたまらなかつた。

だが彼は、結局教えてはくれなかつた。

知りたいのなら……教えてあげるよ……。あの世でね……

あんなこと、7歳の子供が言つわけがない。

何を隠しているのか。

日々を過(じ)しながら、何をしたがつていいのか。

あの姿の裏に、一体どんなものを抱えているのか、知りたい。

知りたかった。

ふうと吐いた息が異様に白く見えた。

冬でもねえのに、変なの。

……はあ、ともづ一度ため息を吐いた。

ずるつと、滑るように堤に寄りかかってみる。

よへ、こゝまで……抑えてきたもんだと、白廟の笑みを浮かべる。

ふと、顔の前で手を広げてみた。

ずっと、否定し続けてきたことなの……

それを、俺が自ら行うことになるなんて……思つてもなかつたな。

誰も予測すらできなかつた。

俺だつて、想像すらできなかつた。『今』がここにある。

……後ろは見ない。なぜなら……

今さら、後ろを振り向いたら、俺は……あつとまた、あの日に戻りたくなる。

あつとまた、この選択を、やり直したくなる。

そして、『これから』をおこなつてしまつたら……

そこから、『今』という過去を振り返つたら、……俺は、死ぬほど後悔するだろ？

だから、前だけを見るという選択をとつた。

何も知らない他人は、前向きだと称えるかもしれない。

だが、違う。

前だけを見ることだけが、正義じやない。

過去も、今も、全て受け止めて、ちゃんと理解したうえで、反省も悔いも抱え込んだ上で、食い破り、足を踏み出す。

それが本当の、前を見るということを示す。

ちゃんと知つてる。

だから、俺が今している「前を見る」という行為が間違つてることくらい、分かってる。

いつか、こんな日が来るかもしれない……

そうやつて思つてきたことが、いよいよ現実になつたつてわけだ。

俺も……、人間つてことか。

「あれ…。名探偵？」

その声に、ハツとして、顔を上げた。

こんな真面目に、白いシルクハットとマント。光を持つ瞳が、じつとこちらを覗き込んできた。

「キ…キッ…？」

「「」答。そりやあ分かるよな。こんな格好してゐる俺しかいない
じ…」

立つよな、ヒハイカミ笑顔を照らしながら顔を向けてきた。

「眞間から」んなと「」で、ひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
を出すぜ」

フンと、先ほどの自分への嘲笑の余韻を用いながら、鼻で笑った。

「んだよ、そつねえなあ。眞間から、ギャーギャーしたおつさん
達に追いかけるなんて嫌だ。追いかけられるなら、美女がいい？例
えば、お前の彼女とか？」

「ぶつ飛ばすぜ」

一気に「ナン」の刃が鋭くなつたので、キッズは冗談だよ[冗談、と彼
をなだめた。

そして、そのまま「ナン」の刃線までしゃがみ込んだ。

「で、や」

「なんだよ」

いきなり、すいすいと顔を近づけてきた奴に、少し慌てる。

「お前、じつしたの?」

「ナンは、思わず息をつめていた

さつきまであつた軽やかな空気は、こいつの間にかどんむなくなつていたからだ。

「…じつむじねえよ…」

「じつもじねえわけねえんじゃねえの?」

やはり、真剣な瞳は貫いてくるばかりで、決して揺れない。

そこから、絡み合つ視線を外したくなる衝動が、胸奥からもぐもぐと湧いてきた。

「なんで、テメエがそんなこと勝手に決めてんだよ」

「壁に、ずるずるともたれかかったまま動かないし、思いつめた顔してたぜ」

「…そんなん、別に休んでただけだろ」

とつとつ、こんな奴と見合ひでないで逃げてしまえばいいのだろうが、壁に押し付けられたようなこの状況は、その道を歩えてはくれなかつた。

「……ふーん、あつそ。別に俺は名探偵が何で幽んでてもびりでもいいんだけどね。でもわ……それなら、俺がこいつやって心配しちまつべらーいの表情を、晒すなよ」

「んな顔してねえだら。てめえのただの思い込みだぜ、そんなもん」

「俺が?……お前を」

ダンツー!と鈍い音が耳の隣で鳴つたと同時に、白い手袋で覆われた拳が横目に入った。

「ナメてない?俺の!」と……

「…………」

「俺を、そんじょりひこひの泥棒と比べんなよ。…………それにおめえの目」

「……目?」

「逃げたくて堪らないつて、揺れまくつてるぜ」

そういつた怪盗に頭には、もう怒りを含んだ威厳をはなくなつていた。

「……適当なこと……言つておじやねえ」

狭い空間の中、腕を投げるよう振って、すぐ横にあったキッドの手を大きな音を立てて、払った。

「……さけんな。勝手なことばつかぬかすなよ。ナメテんのは、テメエの方じやねえのか」

まるで怒りを散らすのを堪えているかのように、その口から発される声は震えていた。

そんな彼らの足元を、遠慮がちに風が吹き抜けた。

「やー、だけよ。テメエ怪盗だろ。探偵なんか心配すんな

「……探偵……」

「なんで……お前なんかに、俺が心配されなきゃいけねえんだよ。……まあでも……」

そのあとで、呟いた言葉は小ささざさかる声のせいで聞き取れなかつた。

「え、何？」

「……別に。てか、だけつってんだ。邪魔」

どつくよつこ、そこから脱し、コナンはすれ違い追い越すようキッドの視界から外れた。

「……じやあな、コソ泥さん

そういうて振り向いた探偵の顔が、微笑んでいたことを怪盗は知らずにいた。

前を（後書き）

今回は、読者の皆様にも、コナン君がどのよつなじとを隠してこらのか、内緒できな感じで進んでゆきます。心情とかは述べますが、彼自身が何をしようとしているのかは秘密です。予想でできますでしょうか。

会いに来た理由

いい天気やなあ、なんて呟いてみた矢先、ポケットに入れた携帯電話が鳴動した。

誰やろか。そう思いながら、携帯のディスプレイを見ると、そこには【工藤】とあった。

ここ最近連絡を取つていなかつたあいつから掛けてくるなんて、事件がらみかと思い電話ボタンを押した。

「はい、服部や」

「うん。俺工藤」

「知つとる。ディスプレイに表示されるとるからな、お前の名が」

「俺の名ね…」

「なんや?」

「や、別に。んで…お前…来週あたり、休日家にいる?」

「せやなあ。事件とか入らな、いるで」

「やつか」

心なしか彼の声が低くなつた気がして、訝しげに眉をひそめる。

「なんですか？」

「……どうつか迷つてゐるとい。ま、『氣が向きや行くよ』

『氣が向けば、とは。随分、氣分屋な奴だ。

「それか。ま、いこわ。来るなら来るで、歓迎するで」

「ああ。サンキュー」

会話は途切れたし、話もまとまつたのに、何故だか珍しく電話は切れなかつた。

まだ、何があるのだらうか。

「……H藤? どうかしたんか?」

「なあ、服部……」

「なんや?」

先ほどよりも短い沈黙が一瞬、流れた。

「お前や、もし俺が……」

「?」

「……いや、やつぱりなんでもない。もし、なんてくだらねえしな。気にすんな」

「はあ？なんや自分。そのテレビの次回予告みたいな氣になる話の区切り方やめえ」

「悪かつたつて。んじゃな」

突如切れた携帯電話を見つめながら、服部は呆れたため息をついた。

もし俺が……

あの言葉の続きを、工藤は何を言おうとしたんやろか。

なんでもない、じゃないだろ？

何があるはずだ。……気になつてしまふがいい。

あの言葉の続きを、聞ける口は来るのだろうか。

あちらが喋りたがらないのに、無理に聞き出さんは多少気が引ける部分もあるけど、勝手に心にわだかまりを作ったあっちが悪いんや。

…絶対聞いたる。

そう決心をすると、手で包む携帯を、ぐつと握りしめた。

変な切り方しちまつたな…。

無駄な後悔、といつのか。もしなんて、仮定の話などしなければ良

かつたのだ。

あのしつこい色黒探偵のことだ。

絶対、問い合わせてくるだろう。

その時のことを、想像するだけで氣だるくなる。

だが、まあいい。

今までそうしてきたように、はぐらかすことは得意分野なのだから、なんとかできる。

「あーあ……なんで、こんなことになつたかな」

何よりの、発端は……

俺が2人で、1人になつたトキ。

俺という人間の中には、2つの命が灯っている。

そのことを、軽く考えていた毎日は、もうない。

そんなこと出来なくなつた状況に今俺は、置かれているのだから……。

不可抗力。

ところの言い訳は存在するのかもしれないけれど、所詮言ひ訳は言い訳だ。

たとえ、八方塞がりといつ理由があつても。

どうせ、後に残る結末も知れている。

絶望と自分に対する不信が、一気に覆いかぶさるんだらう。

結末に至つたら、楽になれるかも知れない。

だが、それは…極刑。

信じられないほど、傲慢で、許せざる選択。

要は、自分で最低な行為を行い、自分で最悪の刑を用意するだけだ。

いや、刑は、用意されている…のかも知れない。

その前提事項が無ければ、こんな計画立てもしなかつたろう。する必要もなかつた。

でも、もう俺の力じやどうしようもない。

決めたから……だから、解毒剤も貰つた。

一度、息をつき、弱音を吐ききつてなる口を必死に閉じた…。

1週間後、大阪にやつてきた頃には、もつねは星をまばらに輝かしていた。

なかなか、躊躇いを消すことができなくて、気付いたらこんな時間になってしまったのだ。

いるかな、服部…。

腕時計を見ると、短針は7を回っていた。

いつもと容姿が違うせいか、街灯に照らされる影が長かった。

確かに、この辺りだったはずなんだけど…と、周りを見渡すと服部と書かれた表札を見つけた。

あつた、じいだ。

ひとまず、辿りつけたことに肩を下ろす。

「…」

呼び鈴を鳴らすと、案外すぐに田的の人物が出てきた。

「今、行きますー」

まだこちらの姿に気が付いていないのだ。大阪弁のアクセントが田立つ敬語で、こちらに駆け寄ってきた。

勢によへ、田の前にあつた引き戸が横に開かれる。

「はこどりひつわ……」

田の前の顔を見た瞬間、平次の表情は驚愕に変わった。

「……へ……ひい……？」

「ああ」

そう。呼んだ相手から帰ってきた声は、まぎれもなく工藤新一当人のものだった。

「……へ……ひい、おま……戻ったんかーー？」

「いいや、一時的だよ。試作品……飲んだだけだからな」

「や、さよか……。つどないする、家、上がるか？」

平次が驚きを引き摺りながら、提案を持ちかけると、新一は首を横に振った。

「別のとこがいい。近くに、公園とかねえの？」

「え? あ、せやなあ……。つん、ちよつと工藤こいで待つとけ。足、持つてくるわ」

「足?」

「バイクやバイク。歩くとわざと時間かかるんや」

「あ、そういうこと。悪いな」

「ええって」

足早に服部はその場にバイクを持ってきた。

「ほんなら乗れや」

その言葉を聞いて、頷き、後ろに跨った。そして、特に言葉も交わさずに、2人は黙々と目的の場所に向かった。

なんの変哲もない公園だった。

ただ、暗闇の中で設置された街灯に光を授かつた遊具や木々が綺麗に見えた。

適当なベンチを探しながら、新一はそういうやさ、と呟いた。

「バイク乗りながら、思い出したんだけど、この前奈良だったか京都だったかで、お前が寺で最後剣で犯人とやり合った事件あつたじやん」

「…ああ、そういうやああつたなあ。それがどうかしたんか?」

「んでも、オメエ一回犯人に弓で狙われた後、バイクで交通法思いつきり無視つて、犯人追いかけただろ?」

「え…あ…あれなあ……」

横田で見やると服部は、思に切り顔を極めていた。

「やつぱ、色々あつたんだ？」

「色々あつたなんでもんやなかつたわ、ま、並然免停へりつたやつ。それくらこはまああるやつ思つてたからわせじせんかつたんやけどな？やのあとがや」

「やのあとへ。」

「親父にじぶん叱られるわ、おかなにじもやたらと言われるわ、散々やつたんや。犯人追いかけるんじ、いちじちそんな先のこと考える余裕ないつちゅうんじや。わー…ほんま、あらもつ一度と勘弁やな」

「やつや怒りやれりへ…」

なんて苦笑してみれば、笑い事じやないでつじト田で睨まれた。

「悪じ悪じ」

「ま、ええけど。やこや、工藤、じゅうに来た理由なぞやつたらんや？」

思こ出したかのよつて、元ひびひが首を向いた。

「や…今回せや、特に理由あつたわけじやねえんだ。余つておいつじ、悪ひしや…」

「余つておいつじ…なんやねん？」

一度、新一は俯いた。前髪で顔の上半分に影が出来た。

だがすぐに、平次のではなく、ただ真正面の遠くを眺めた。

「…………工藤新一は、これから殺されるからさ…………」

……その言葉に呼応するかのよう、あたりの木がざわりと蠢いた。

殺す者～本当の理由を知る者～

隣の存在が、何を言つているのか分からなかつた。

工藤新一は、殺される？

「何…訳わからんこと…畜生でんねや…お前が…そない簡単に、殺されたりするかい…」

「もう…どうしようもねえんだ…」。どう抗つても、工藤新一が死んじまうことは変えられない。逃げたつて、変わらない…なぜなら、そいつが出てきた時点で、今の俺は消えるから…」

「は…？」

「……………やつ…。工藤新一を殺そうとしてるのは…、もう一人の俺である…」

江戸川コナンなんだよ…」

言葉を失つた。余計に訳が分からなくなつて、驚愕で田を震わし、見開くことしかできなかつた。

江戸川コナンが、工藤新一を、殺す…？

「ほんま…訳、わからへん…なんや、それ…。第一…お前探偵やろ…！そんなお前が殺すなんて…」「分かつてん…！」

言葉を遮るよつて、唐突に叫んだ工藤に、思わず息を呑んでいた。

「……分かってるやつ……！探偵の俺が……、殺人なんて、ありえねえってんだろ……！？探偵と真逆の犯罪者……ずっとそれを否定してきたつ……、そんな人間がつ、殺人を犯すことになるなんて、俺だって、俺だって信じたかねえよ……！けど……つ、どんなに否定したつて、拒絶したつて、もう免れられなくなつちまつたんだから……」

新一は荒ぶる口調のまま、自分の体を抱きしめるよつて、左手で右腕を強く掴んでいた。

服部は、混乱していた。

彼が苦しんでいるのも、辛いのも分かる。

でも、理解も納得も、うまくできなかつた。だから、彼の今の抱えてる事実を整理したかつた。

「……落ち着いてや、工藤……そうしてくれんと、俺も……よく分からへんねん……、せやから、もつと落ち着いて……」

「……落ち着けるわけねえだろ……つーどつやつて落ち着けつてんだよつー逃げることもつ、田を背けることもできなくなつちまつた今じやつ、もつじよつもねえんだつ……だけどつ……」

そこで新一は口を噤んだ。暴れる感情を無理に抑え込んだのが、平次にも伝わつた。

「…………悪い、やうだよな…………。何もこひなんじや、分からねえよ

な……なのに俺、叫んだりしまつて……

必死に平静を装つ回しの少年を見たまま、辛せつて平次は眉を寄せた。

工藤新一が、江戸川コナンによつて殺される。それによつて、彼は苦しんでこる。

そして、工藤新一は一度といなくなるところだと。

つまり……

「…………工藤、もしかしてお前…………体に耐性できてもつたんか……？」

図星だと思つた。だから、神妙に告げたのだ。

だけれど、工藤は驚いた顔つきをするととも、辛せつに顔を歪めることもしなかつた。

ただ、どこか辛せつに睫毛の影によつて更に悲しみの色を濃く瞳に宿したまま、微笑んだだけだ。

「耐性…………とは、少し違うのかもしれねえな

「え……？」

「薬が効かなくなつたんじゃなくて……、これ以上薬を飲んだり……。いや、やつぱ向でもない。つまり、まあだつと言えど、この姿で会えるの、……最後になつちあつだらつから……間に合わなくなる

前に、お前に会つとあたへて…。

本当の姿でや

本当の理由を打ち明けられないのなら、せめて本当の姿だけでも晒しておきたいから。

だから、ソニーに来たんだ。

そこで、ようやく新一は平次を見た。そして、ソニーに来て初めてちやんと笑つた。

「…じやあな」

「ちよ、待ちこいやー藤つ。今から帰るんか？それにこれ以上薬飲んだらつて…」

「帰るよ、まだ8時だし。全然東京行きあるだら。あと、さつきの言葉も、気にすんな。わりいけど、服部とちまで送つてくんね？こつからじや、駅までの道分からねえんだよ」

……同じだ。

またいつもなる。前だつてそうだつた。

電話の時、『もし俺が…』の後に、さぐりかすよつて氣にするなど言つたのだ。

どつしてだらうか。

何故、肝心な部分だけはぐりかすのだらう。

同じ探偵のこの俺に、ここまで違和を感じさせておいて、またはぐらかすつもりなのだろうか。

「…ふざけんなや」

「えつ…？」

服部はベンチから立ちあがった新一の腕を強引に引っ張り、再びベンチへ叩きつけるように戻した。

背に相当の衝撃が伝わったのか、瞬時小さなつめき声が彼の口から洩れた。

一方服部は、それと同時に立ちあがり無理に座らされた新一の前に立ち、その胸倉を掴んだ。

「つどい今まで、ばぐらかす気なんや！」

もうこい加減にしてほしい。

大事なことを、重大なことを何も知らされないまま、中途半端に事実を知らされ聞かされて、彼の本当に思つてゐることすらはつきりと分からせてもらえない。

そんな中途半端で、いい加減な状態のまま、放置され、知るなど、気にするなど、つて言葉で勝手にくぐられるなんて、『冗談じゃない』。

きっと、俺がそう思つことは、藤にだつて分かるはずだ。

だから余計に腹が立つた。分かつていて、知つていて、それでも尚騙しばぐらかそつとするさまだ、我慢ならなかつたのだ。

「ずっとねうやつて、自分で分かつた顔なじるつもりなんか！んな、アホな真似、ずっと続ける気なんか！？そない事しつても、いつかはバれるんやぞつ！」

新一は胸元から締め上げてこいる手を外そつと、その手に強く指を食いこませた。

手首に強い痛みを感じた平次は反射的にその手を放した。

首元を解放された少年は開いた気道に空気を吸い込み、咳き込む。

その咳をなんとかおさめて、鋭い目で田の前の相手を睨んだ。

「……………バレねえよ

あまりにも強く激しく揺れる眼光に、彼の前に立ちはだかる探偵は言ひ返す言葉を見つけられずにいた。

「バレちまう程度のことなんて、抱えてるわけねえだろ。お前にも、誰にも、本当の理由なんて知ることなんかできるわけねえんだよ」

威圧感を纏うまま、勢いよく立ちあがると服部を思い切り押し退け、暗い闇の中に消えて行つた。

ポツンと佇むベンチの前に残された服部は、ただ漠然と、その背中を眺めることしかできなかつた。

殺す者へ本当の理由を知る者へ（後書き）

また良ければ、感想や意見、いただけると嬉しいです。

抱えてくるものの大それ

びつやつて、ここまで来たのか分からぬ。

気づいたら、工藤邸の前に一人、街灯も消えた真夜中に、立つていた。

でも、ずっと、ずっと、服部の言葉が頭にこびりついて消えなかつた。

ずっとそつやつて、自分で分かつた顔しとるつもりなんか！んな、アホな真似、ずっと続ける氣なんか！？

…つもりなんかじやない。分かつた顔してゐわけじやない。

俺だつて、分からぬことだらけだつた。戸惑いだらけだつた。

あのまま聞いていたら、せつかく目を反らして決心した過去が、今が、揺らぐ氣がした。

簡単に決めたことじやなかつたのだ。だから……あの場から逃げてきた。

今、自分の胸のうちに在ることは、さうと打ち明けられるもんじやない。

説明だつて、上手くできるか分からぬ。

“どこのまではぐらかす気なんや！

……どこまでだらうか。永遠なんてない。でも、俺には到底予想できない未来までは、きっとはぐらかしてはいるんだろう。

だが、一瞬自分に詰まっている事実を掘り出すやうとしてくるあいつが怖かった。

そして何より、瞬間的でも、この口から眠る事実を紡ぎやうこなつた自分が怖かった。

だから手遅れになる前に、口を噤んだ。

自身の内で暴れる獣猛な感情も、事実も、抑えなきやいけない。

…………どいつも、言いたくない。

そう思つた刹那、もの凄い鼓動が鳴つた。

ぐくんっ……！

唐突な苦しみと痛みに反応しきれなかつた体が、門に当たる。がしゃんといつ音を立てて、俺の体はその鉄の柵をずるずると滑つた。

ここでは元に戻れない。

その本能が、異常な汗を噴き出す体を無理矢理動かして、なんとか玄関に転がり込んだ。

だがそこまでが限界だつたらしい。

異常な熱。激痛。それらが身体を蝕み、拘束するように締め付けていた。

骨が溶け、身体が縮んでいく。そんな奇怪な感覚が全身に走る。

耐え切れず漏れた悲鳴とともに、その姿はもう一つの姿に化していった。

半端でないダルさを残す身体を起こしてみた。

先ほどまであったものとは比べ物にならないほど、小さくなってしまった手を天井にかざしてみる。

「やつぱ……もつ一件分は……持たなかつたか……」

呟いた声が暗い空間にのみこまれてしまふを感じると、乾いた笑いを零した。

大丈夫……。

まだ、いける。いけるはずだ。

次が、最後のチャンスになるだろうけど……。

汗がしみこんだ布を纏いながら、俯いた彼の額からは、一筋の滴が垂れていた。

隣の家からなんだか一瞬、がしゃんといつ音が聞こえた気がして茶
髪の少女はふと身を起こしていた。

こんな夜中に…何かしら?

気のせいかとも思つたけれど、やはり一度疑つてしまつたことを抱
えたまますんなつまた眠りに付けるほど、素直な性格ではない。

隣のベッドでいびきをかき眠る博士を起しやれなこと、やつと部
屋を出て、静かに家を出た。

しかし、そこには特に何もなく、静まり返るこつもの夜だった。

それに少し安堵し、再び家の扉を閉めた。

しかし一度覚めてしまつた頭。すぐに布団で寝息を立てるのは難し
い話だと思った哀は、紅茶を入れたカップを持ち、ソファーに座り
こんだ。

ダージリンの香を漂わせるそれをひとつ喉に流し込みながら、つい
最近解毒剤の要請をしてきたコナンのことを思い出していた。

試作品を試すなら、それなりに結果を報告してもらわねば困るのだ。

けど…与えた解毒剤を握りこんだとき彼が零していた微笑みがどう
も引っかかっている。

なんだろうか?

あれは、再び元の体に戻れる高揚感から来る笑みではないよつて思えた。

だとしたら？ だとしたら、一体何なのだ？ 単純な危機状況を回避するためだけではないのか。

彼が、解毒剤を欲しがる、もつと、もつと深い理由つていたら……。

あー……駄目だわ、全然分からぬ。

彼みたいに、心当たりから全てを整理して、パズルを組み立てるよう推理していくなんて芸当ができるばいいんだけどね。

よく、あんなことができるものだわ。感心する一方、あきれることが度々あるし……。

狂おしいほど興味深いと感じる純粋な心を持った彼。

そんな彼に幾度も惹かれた。けれど、そんな純粋な心を持ちながら、多くの暗黒を持っているのだろう。

それを全く言おうとも、晒そうともしないから、さつとも分からぬのだけれど……。

無理して、無茶して、どうしようもなくなつた結果が、私たち周りの人間に刃物を向けているのと同じくらい切羽詰めになることを、彼自身、ちゃんと分かっているのかしら……。

強靭な強さや優しさを抱えていると考えていた思いを、その彼自身に壊されことになることは、まだこの少女は気が付いていなかつた。

抱えてくるものの大ささ（後書き）

また、意見、感想等あつましたら、どうぞよろしくお願いいいたします。

目を開けたら、眩しい光が窓から差し込んでいた。

驚き、がばりと起き上がったが、座っている下は、冷たい床。

「ああ、そうだ。俺、昨日、あのまま意識飛ばして…そのまま寝ちゃったんだつけ。

乾いた汗が異様に冷えたせいか、身体がだるい。寒気もした。

なんだらつか…。

元に戻つてから、「ナンの姿になるとさにあつたはずの名残惜しさが消えていた。

不思議だつた。

何より、元の姿を自身でも望んで、このままで居続けたいと思つていた。

そして、幼い姿に戻るときの悔しさは、底知れないものだつた。

それははずだつた、はずなのに……

あのとき抱えていた高揚感も、歡喜の心も、縮んでしまつたときの湧きあがる悔しさも、何一つ感じなかつた。

なんで……。じいから、それまで変わったんだろう。

何も分からぬ。自分のじとのへせに……全然分からぬ。

分かるのは、元の姿になるときも、じの姿になるときも、静かな無力感と辛さがあつただけだ。

ちゃんと決めた。自分自身に決心を掲げた。変に大丈夫だという確信をしていた。

それが今は、揺らいでいる。

確信？

馬鹿馬鹿しい。確信なんて、そつ簡単に持つちゃいけないものなんだ。

確信は、ある小さな種から可能性といつもの力を膨張させてようやく出来上がるもののじやない。

そんな課程を吹つ飛ばして、すんなりと摑めるものじやない。
……何、今さら、気がついたんだ。
遅すぎるよな……。

限つある時間の中での、俺がしなくちゃいけないじと。はじめづか?
……違うな。

思えば、どんな動悸だったんだろうか。

理由を曖昧にしたまま、元の姿で会つべき人間に会つて、最後だと伝えて……。

そして、馬鹿なことを盾にして、そこから自然に消えていく。

誰にも、真実を知られず、ほのかに自分で全てを終わらせる。やつしたら、最低限に抑えることができるんだ。

周りの人間に傷をつける要素を……。

どうやって考えても、無傷の状態は、無理なんだと感じた。

だったら、少しでも軽減させるしかない。

少しでも……、見る涙を、減らしたい。

それなんだろうな、きっと。

色々、怖がってるんだ。前に進めてるのかすら不明だし、曖昧だし、全然はつきりするものがない。

それなのに、明らかに、明確に、抉るよつての口元に沁みこませぐることは止まらない。

少しでも振り切りたくて、立ちあがつた。

ダボダボの衣服をまとい、ずりながら歩く姿は、随分無様だらう。

だが、早く脱ぎたかつた。脱いで、清潔な香を余すものに、身を包まれたかつた。

自分を、ほんの少しだけでもいいから、清净化したかつた。

服を着た。着替えた。今の身体にぴたりと合う。しかし、何も変わらなかつた。

『 』

どうして、ちつとも変化をもたらしてくれないのでしょうか。

我に返つたこりには、頭から痛いほどの雨をかぶつていた。

瞬間の内に、思い切りシャワーのノズルを回していたらしい。

壁に手をつたわせながら、だらしなくしゃがみ込んだ。

俺は弱いつ

まるでその言葉を反響させ、輪唱していくよつて、空気が振動した。

全ては、あれから始まつた……。

ある日、解毒剤の作用を起こす発熱と、白乾児を服用する機会があつたのだ。

事務所にはだれもいなかつたし、条件は元壁だつた。

しかし、元に戻れなかつたのだ。

いや、わずかな変化は確かにあつた。

一度、この身体は、成長を遂げていつたのだ。だが、戻りきる前に、再び戻つてしまつたのだ。

己の田を疑つた。

……嘘だらう?..?

疑つた。しかし、感じてしまつた。

荒い息を繰り返しながら、ただ茫然となり固まつて、白乾児が僅かに水滴として残つたコップに映つた自分を見つめる。

もう、耐性ができてしまつた。

試作品を服用しすぎたのか?だけど。数回しか。あんな数回で、もう戻れなくなつちまうのか。

まさか、そんなはずない。

ちゃんとした解毒剤じゃないからだ。そう思った。

だから、じつと灰原がいない隙を窺つて、試作品を盗み出した。

それを飲用すると、なんとか元に戻ることに成功した。ちゃんとしました17歳の姿だった。

心底安心した。だがそこでまた、大きな違和感を感じ始めた。

元にちゃんと戻った姿の状態でも、いつも、苦しかった。

脈は速く、頭痛もあった。心臓も圧迫感が常にあった。

異常

だった。

もしかして、本当にもう、身体が持たなくなってしまったのか。

壊れかけているのだろうか。

だとしたらどうする。どうするのだ。

まだ解毒剤は試作品段階。完全版なんて、先の見えない未来にある。

だが、これ以上試作品を濫用すれば、服用者のこからが持たない。

それに、工藤新一は、失つてはならないはずの人物。俺の『本物』で、その『本物』には待つている人間がいる。

下手したら、それを裏切ることになる。

そしたら、田に見えてる。あいつが、涙を流す」と。

その姿は、その姿だけは、一度と見たくないと思つてゐるものなのに…。

どうして現実はこうなのだ。

深い絶望を味わつた。

そして、一度降りかかった悲惨な吹雪は止むことを知らなかつた。

耐性と身体で、悩んでいた矢先。

それとはまた別で、蝕まれていることに気がついた。

そう何もかもがそこにあつた。

考えれば、その大きな悪魔の軸を舞台に、悲劇は始まつたのだろう。

多分、もう一、二回での急激な肉体変化は限界だ。

しかしそれでも、ちゃんと、もう一度とそのスガタになれる未来が
なくても

その姿を望んでくれている人の前へだけは、本物の足で、歩き立ち、
話をしたかった。

その変わり、それは毒薬を服用したことにより生まれた『江戸川コ
ナン』が「江戸川コ」の人生を背負つた。

つまり、後からひょっこりと表れた主人公が、本来の主人公を殺す。失くす。

… ありがちなストーリーだと苦笑する。

だけど、現実は笑えてしまうほど、軽々しいものじゃない。でも、その江戸川コナンの人生も、随分と限界期間を迫られてしまった。

おそらく、工藤新一がいなくなつたら、あいつは…蘭は…涙を滴らせるだろう。

だから、もうそれ以上あいつに、哀しい闇を与えたくない。

殺人者になる江戸川コナンなんて、ひつそりと消えてしまえばいい。工藤新一と江戸川コナンが同一人物だというまぎれもない真実は押しこめる。

たとえそれが、本当のことだとしてもどっちみち、現実に見えるものは限られていく。

だったら、結局変わらない。押し込めようがどうでもいいのだ。

そう決めた。

「…それが、揺らぎをそいでぐらぐらとしている決心だ
った。

俺は弱い（後書き）

また、感想、意見よろしくお願いします。

元から存在しないもの

だけど、だからこそハ方塞がりの状態に陥っているからこそ、俺は、決めた心を動かしたらいけないんだと思つ。

工藤新一は死ぬ。

そして、江戸川コナンも消える。

その理由は、どうしようもない身体の限界。

もしかしたら、俺の命のカウントダウンは、あの妙薬を飲んだときから、始まつっていたのかもしれない。

気付かなかつただけで、俺を消滅させる爆弾の起爆スイッチは入つていたのだ。

どうじよつもなくしんどい。叫んで泣いて、開き直れるものなら、そうしたい。

でもそんなことじや、今感じてる苦しさも辛さは和らげられない。

頭から突き刺していくかのような水。

それから逃れるために、そこから横にそれで、壁にもたれかかった。

とめどめなく滴る雫。それを見つめながら、瞳に膜が張り詰めるのを感じた。

そうだ。…それでも…、それでもやつぱり、限られている時間だから、今の自分でも、大切な奴のために使えることを感じたい。

それしかまともである理由がないのだから。

R R R R R R R R R

電話が鳴り響いたのを耳に感じて、切れないうちに電話機器を手に取った。

「はい阿笠です」

澄んだ少女の声を聞き取ったなり電話の向こうの相手は唐突に叫んだ。

「工藤出せや工藤！…！…そこにあるやつ！…？ええ！…？」

その騒音ともいえる大きな声を頭に響かされた彼女は、思い切り眉をしかめた。

「なんなのあなた。第一声がそれ？ええ！…？じゃないわよ。ふざけないでくれる？」

「ふざけてなんかあらへん！…で。工藤は！…？」

「いないわよ。ここに住んでるわけじゃないんだから

と返してやれば、そんなはずあらへんと大反論。

「うるさいわね。だつたら確かめにくればいいでしょー!？」

「ああええわ! 行つたるー事務所におらへんなりそこしかないわー!」

「あつたきりブツツと通信されていた電話は切れた。

本氣で来る氣なのかしら……。

でも事務所にはいなかつたつて言つてたわね。

だからつて、今日は休日。普通、どつか行つたとか考へないのかしら。

だいたい彼の携帯に連絡すれば済むものなんぢやないの?

それも駄目だつたつてこと?

異様に、怒つてたし…。

だからつて直接関係してない私に当たらいでほしいわね。

盛大なため息を吐いた少女は、再び眉をひそめた。

電話を切り次第、思いきり走っていた。

あの時、ただ呆然とするしかなかつたけれど、時間が経つにつれてなんだか腹が立ってきた。

バレちまう程度のことなんて、抱えてるわけねえだろ。お前にも、誰にも、本当の理由なんて知ることなんかできるわけねえんだよ。

オマエニモ、ダレニモ、ホントウノリコウナンテシルコトナンカデキルワケネエンドヨ

確かにあいつはそう言った。

つまり、自分が分かつてるとこいつこと。

また抱え込んでいるといつこと。

何で、あいつはこつもああなのだらう。

たつた一人で無茶をして、抱えて、平氣な振る舞いをする。

俺は、同じ探偵だから、あいつの困惑も分かる氣がある。

戾れないと言つていた。

だけれど、それだけじゃないんだと思つ。

あのあとに何を言おうとしたのだらうか。

工藤新一に戻れない。江戸川コナンになる。

江戸川コナンになるんやろ？

でも、あいつは、江戸川コナンは殺人者呼ばわりした。

でもそれは違うのではないか。

確かに、本当の姿は工藤新一のかもしけないけれど、江戸川コナンだって、大切に思われているあいつ自身。

それをそんな邪険に、適当に、犯罪者呼ばわりしていいわけがない。

だから、それも伝える。

そのために、あいつのもとへ走っていく。

よつやく着いた。

乗り物に乗っているとき以外、ほぼ走ってきた。その為、肩が上下するほど息が荒れていた。

ノックもベルも鳴らさずに、阿笠邸に押し入ると、案の定不機嫌な顔が、こちらを見ていた。

「まさか、本当に来るとは思って……たわね、少し

「当たり前や、俺は有言実行の大きな男やからな。で、工藤ほんまにおりへんのかい」

「だから最初からいないつて言つてるでしょ。しつこいわね。携帯は？繫がらないの？」

「繫がらん。こいつに来る途中も、なんべんもしたけどな。一つも通じんのや」

「そり…。ま、何でもいいけど、工藤君になんかあるの？」

その質問に、服部は頷いて、昨日あつたことを昨夜あつたことを話した。

それを聞いた、哀の顔は愕然としていた。

「…………どうこう…………」

その反応を見た服部もまた啞然とした。

「どうこう」とて、あんた工藤から聞いてなかつたんか？」

「聞いてる……わけないでしょ……？もつ居れないって……本当にあの人言つたわけ……？」

「あ……ああ……」

「訳、分からないわ……。絶対何か隠してる……って証拠よね。そうなつたら聞きださないといけなさそうね……」

もしかしてまだこの彼女に「見える」とは早すぎる」とだったのかも知れない、平次は事情を話してから少し後悔していた。

でも、何かを隠すあいつが悪い。

白状をさせてやりたい。…いや、させなきゃいけない。

工藤が、隠そつとすることは、だいたい酷いことだった。

だから尚更、……

。

「ねえ、ちよっと

「えつあ、なんや」

「エリにも事務所にもいないなら、工藤邸行ってみない? もしかしたら、いるかもしれないでしょ?」

「ああ……わうやな

そして工藤邸のベルを鳴らしてみると、反応がない。

「おひくんのか~?」

そういうつて勝手に侵入し、玄関の取っ手を回してみると、開いた。

「…あ

「……このつじ」となんじやない?「

「せやな……」

しかし、探すまでもなくそこには田の人物は佇んでいた。

全身びしょびしょ

。

「……え……何でおめえり……」

「う……あなたじゃ、どうこういつもつなのー?」

いきなり隣で叫んだ茶髪の少女に、じゅりが驚いた。

「どうこういつ……何が、だよ……」

「とほけないでつ……つどうこういつの意味なのよー……もう戻れないつてー!」

その言葉に、コナンの田は大きく開かれた。

「なんで……オメエが……それを……」

「すまん……」藤

謝った服部に理解したのか、彼は舌打ちをした。

「余計なこと……言つてんじやねえよ」

「なんで早く言わないの…。耐性ができないってことなの…？」

「…やうなんじやなーの」

「ちよっと…何でそんなに投げやりな態度ができるのよ…？それが出来てしまつことは、あなたの本来の姿が失われる」とになるのよつ…！」

「つ…。分かってるわ、そんなこと。俺だって、馬鹿じやねえんだから、それくらいすぐ分かる。でも、色々悪運重なつちまつたし…？それに、これは俺の問題だ。オメエにだつて関係ねえよ」

「…なあ工藤…やっぱお前、それ…変とかやつか…？」

「ぽつりと呟いた服部は、首を傾げるかのよつて工藤が視線を向けてきた。

「お前…前、自分のこと…工藤新一は、殺されるていつた…そして、殺人者になるのは江戸川コナンや…わつわつたよな」

「…ああ」

「やつぱそれ…絶対おかしいと思つたや。…なんや、俺から見てるじ、お前、自分自身の中にある江戸川コナンを邪険に扱いすぎに見える…。江戸川コナンにやて、大切に想つてくれるての奴いつぱいおるんとかやつか…。工藤新一と、回じよつて…」

心を抉るよつな感覚が頭を突きぬけた。

ずっと頭の奥底で引っかかっていたことだった。

「……るせえな……！だからなんだよ！テメエに何の関係もねえだろうが！つ江戸川コナンをどう扱おうと関係ねえよ！俺の問題だつってんだろう！」

「ぐビ……」

「コナンが誰にどう想われてもつ、所詮コナンが工藤新一の中での偽りの人生でしかないことには変わりはない！江戸川コナンなんて、元々いないんだ！」

全身が濡れて、どこから水が滴っているかなど分からなはずなのに、蒼い光が灯るそこからは、ただ一点伝う者が見えた。それは、ただの水でしかないのか、涙であるのかは分からぬ。

「そんな奴、どこでどう扱われようがどうだつていい！だから最初から時間を決められた！いちゃいけないはずの存在が、いるべき存在をもみ消すことになるんだからつ……つ誰にも言いたくねえ！言つたら、また誰かが暗闇を背負う！つもう俺はつ……俺のせいで流す涙もつ、無理に笑う姿も見たくないつ！」

「……工藤君……」

「つ一度と嫌なんだつ……！俺が無茶するとかつ、みんな言う！でもつ、本当に苦しんでんのは俺じゃないつ……みんなの方じやねえかつ！服部だつてつ、灰原だつてつ、蘭だつて……俺が何か聞いたつて平気なふりをするつ……辛くて、言いたいことあるばずなのにつ、黙つてるじやねえか！」

叫び続ける所為で、コナンの声は枯れしていく。でも、それに構わず、とどまらない心情を言い続けた。

「その原因を作ってる俺がつ、これ以上原因を作る様な真似、できるわけねえだろが！」

だから、どんなに聞かれても、聞われても、気付かないふりをして、逃げてきた。

「たとえその場のオメエたちの雰囲気に押されて、知りたいからとせがまれて、口から本当のことを話したとしても、改善されたと思うのは、その時だけつ……時が立ち、ちゃんと事実に直面したその時、オメエらがどんな顔をするのか目に見えるつ！　その場の感情に流されつ、後に死ぬほど後悔するのだけはつ一度と嫌なんだよつ……！」

好奇心という名の一時の感情にせがまれて、取り返しのつかない偽りの人生を送るようになつてしまつたときのようないいだけは、もうしたくない。

「嫌なんだよつ……！」

必死だった。

だから、これで一人に納得してもらえなかつたら、もう後がない。

そう思つていた。

反論を浴びるかもしない。

呆れたように、踵を翻されるかもしない。

でも、これ以上聞かれたくはなかつた。

しかし…

「工藤…………お前、優しいなあ……」

実際に開かれた口から出されたのは、予想も想像も絶するものだつた。

元から存在しないもの（後書き）

文章構成つて難しいですね。

また感想等よろしくお願いします。

思いの錯誤（前書き）

暗いですね…。

思いの錯誤

「上藤…………お前、優しいなあ……」

コナンは、彼の口から発された言葉に田を見開いた。

優しい？

信じられなかつた。そんなわけない。

自分の弱さのために、結局ここつりを苦しみつゝる。

それなの、何故？

「……今まで他人の」と考へて、そのつまで悩んでるやう……
苦しんでま……。やっぱ自分、『うつすう』いわ

白い歯をのぞかせて笑つ。

少年は、服部の言つて納得ができなかつた。

……やうじやない。やうじやないだり。

つまく区切りがつけられないままグダグダと事を引き摺り、何もかもが中途半端で……

抗えない、もがけない。それが、どれだけ情けないことなのか……

そして、自分の中に2人の存在がいる残酷さを……

お前は、知らないだけだろう。

「けどな。『うつす』にせど、お前どうしようもなくアホや」

もう彼の目に笑みはなかった。ただ一途で真剣な光を抱えてくる。

「どない理由でそこまで追いつめてるんか、お前が言わんからさつぱり分からん。…確かに、江戸川コナンは架空の人物と称されても、おかしくないものや。けど、だからてな、江戸川コナンがどうなつてもええなんて理屈、通用せえへんで」

キッヒコナンの瞳を見据えると、彼の体はびくつと震えた。

「なんで……そこまで粗暴に扱うんや。お前の理由聞いてもやつぱ、理解できんねや。偽りの人生ゆうて、…そんなんで、その姿の人生扱つてええんか。そんなんふうにくくつてしまったら、お前がその姿で過ごした時間は、どうなるんや。その間に、出来た大切な存在もまた、偽りにしてまうつもりなんか? そない」としてしまったら、お前だけやのうて……」

「言ひなつ……！」

唐突に叫ばれた声に、今度は服部が目を見開いた。

「もうそれ以上、言ひんじゃねえよつ……！」

「…………せやかで、自分……」

「うぬせえ。もつお前に何も言つてほしくねえ」

本音だった。

ここつの中葉は、あまりに正当過ぎて、聞くのが苦しくなる。

嫌でも、耳にべつたりと張り付いて離れない。

言われなくたつて全て分かっているのだ。

俺は……、分かった上で、みんなのから皿をかじつてゐる。

ほり、少しせ離れたところに面の色黒の少年からも……

「なんやほんまにお前むかつくわ

こつの間にか、田の前に来ていた彼に心底驚いた。

いきなり肩を掴まれ、壁に思い切り押しつけられた。息が詰まつた。

昨日と似た状況だな。頭の隅で冷静に思い出す。

「そない俺にうだうだ言われたなかつたらな、全部話してみい。自分だけ分かつて、こっちに何も言わんちゅうんが、我儘すぎるんや。それで、何も言つた言われて、はいそうですかつて頷けるかい」

淡々とした物語このわりに、ざいが荒々しさが含まれたような震え

が混ざっていた。

その証拠に、肩を掻む強い力は、さらに増していく。小学生である薄い肩は、その力に悲鳴を上げ始め、運動するかのように、口元の顔は歪められた。歪められたその顔で、口元だけは冷酷な笑みを浮かべる。

「じや、黙つてほつときやいこだ。お前が納得できなかつが、関係ねえつひとつてんだ。…しつこいんだよテメエは」

辛辣すぎる口調で、遠くから「うつ」と不満がまざる声が聞こえる。

「い加減にせえや…。なんなんや自分…。お前が散々何かあるよな言い方しよるから俺は気になるんや。そない関係ないなんて口聞くからやつたらな、最初から何か吹きかけるよつな真似するんじゃないわー」

「…黙れよ」

「黙るかボケ。ほんまふざけるんやないだ。実際さつあだつてそういうやないか。色々悪運重なつたつて…そんな分かりやすく何かあること晒して、それで関係ない言つのはおかしすぎるんや。結局お前は強がってるだけで、ほんまのほんまは、誰かに聞いてほしいんじゃないか…？」やつせ、絶対やつせ

「黙れ！でたらめばつか抜かしてんじゃねえよー。」

そつぱびながら、悲しみの光がその田で波を立て始め。

「でたらめやない。そんなことお前やつ分かつとるやしない……分かつてその事実から離いて……

「 もう言つなー。」

「言わんといられるかつ……」そのまま俺が引きさがつてしまもたら、お前また心閉ざすんやろ……？俺はただお前と真つ白で綺麗な交友関係を築くためにこうして叫んだるんやないぞ！お前がつ！お前が前みたいにただ一心に何かに取り組む姿で、おれるようになつてほしこからーせやから……。」

「ひつひつ、お前を追い詰めるよひつなことしだるよ。」

そつ続くはずの言葉が消えていた。

「 はは、さじや……ねえ……」

押さえつけている身体が壁に寄りかかりながら、崩れていぐ。

苦しそうに辛そうに顔を歪めながら、床に座りこんだ。

「へー 工藤？」

息が荒く、顔も赤い。

「放せ……。つか……も、マジ帰れ」

そつ紛ぐ声は低く、険しかつた。

「なんか、もうよくわからなくなつてきました……。

色々考えつから……今日は、帰れ「
どうしたのだらう。

それ今までの荒々しい威儀は急になくなってしまった。

静かな、無を表す様な空気が彼自身を包んでいた。

「灰原」

「ふいに呼ばれたことで、驚愕の色が彼女の顔ににじみ出た。

「わいいけど……適当に、蘭に連絡入れといて……。今日は、帰れそう
にねえわ……」

「……分かったわ」

それきゅうりと、口の形が告げる。

「服部……も、また落ち着いたら話したい。……今は、もうオメエを傷
つけることしかできなさうだからさ」

「あよか……でも、もう嘘は堪忍やで」

そう言つて、服部はその手を話した。酷く赤くなつていて、相当な
力で手首を掴んでいたのだと気がついた。

その手首を、もう片方の手で掴み、脱力したかのよつこだるやうに
その手を下した。

放心してこよぶな表情で、じりじりと見据えてきた。

「…分かつたよ…。またいつか、時が来たときに全て伝える」

「頼むで…」

2人とも真剣に言葉を紡ぎ、叫んだ所為で疲労感に浸っていた。

疲労感と不調をも、背負ったコナンは、壁にもたれたまま、家を出る服部と灰原を見送った。

ふ、と微笑んでみる。

お前の気持ち、すげえ分かつたよ。

そして、決心に区切りがついた。

……やっぱり、俺は誰にも残酷な真実は告げられなこよ…

彼を包むもの

やつぱり真実は告げられない。

告げるには、お前の真つ直ぐな意思と優しい心には、重たずそれが

瞳を伏せたまま、心の中で呑のむと、コナンはやつべつと立ちあがつた。

阿笠邸にどじか深刻な顔つきをしたまま戻ると、平次と良はじとソファーに腰かけた。

「…………藤は…………えらく苦しそうなやな…………やつまの見て、ほんまに想たわ…………」

「…………やつまでは威勢よく彼に怒鳴り返してたくせに、だいぶ弱気な声出さのね」

「や、や、や、俺や、あんときは必死やつたけど、せやけど、あいつの言ふとこ、姉ちゃんも見たやろ」

「…………ええ」

彼の言いたいことは分かる。

言つな！それ以上言つんじやねえよつ……！

テメエに何の関係もねえだろつが！つ江戸川コナンをビリ扱おうと関係ねえよ！

所詮コナンが工藤新一の中での偽りの人生でしかないことには
変わりはない！

そんな奴、どこでどう扱われようがビリだつていい……だから
最初から時間を決められた！

必死に、辛そつて、叫び言葉を発す姿。

身体の所々で、水を滴らせて、あの蒼い瞳を自分への怒りと悲しみ
で揺らしながら乱れる姿。

つもつ俺はつ……俺のせいで流す涙もつ、無理に笑う姿も見た
くないつ
！

彼の優しさが、また残酷に彼を追い詰めているのだろつ。

だから、哀しくて、辛くて、過酷なほど心身ボロボロにして……

。

一体何を隠してそこまで……

そつ考えた刹那、頭にさりとけ甦つた言葉の一部が再びよがつた。

『だから最初から時間を決められた』

…………あ…………

待つて、どうこうこと？最初から時間を決められた？それは本来の姿のこと言つてこむ？

……いや違つ。

その直前に言つていたことを踏まえれば、その対象はおそらく『江戸川コナン』の方。

哀は、考えながら困惑つてゐる、手の平は額に持つていくと前髪をぐしありと掴んだ。

こめかみから汗が伝つ。

……それが、意味するのさ、つまり……

彼の命の期限が……それほど長くなことを彼が把握してゐて」とへ。

……ちよつと……待つてよ……。

理不尽にも、程があるんじゃないかな。

身体に耐性が出来てしまつたから、元の姿には戻れなくなつた。

……？

そこでまたふと疑問を感じた。

今の状態で、耐性ができたと感じる状態でも、薬の向上をすればなんとかなる可能性が高い。

そんなことへりへり、彼なら考え及び付くはずだ。

それなのに、あの乱れ様となるとこう」とは……他にもつと、もつとその考えを断たされるような、前提的な理由があるはず、……。

解毒剤を服用できなくなる理由……ことだから、その対象に何かが起こつてゐることで……。

頭がこんがらがり、痛くなつてきそうな状態から必死に働かせる。

単純に、単純に、考える。

解毒剤が……服用できない状態……そのままつてこと？

身体が、そうなつてゐることなの？

あなたは、そんな残酷なことを抱え込んでしまつてゐるの？

何故だらうか……

?

頭の中に多くの闇を抱えてどうしようもなく暗い瞳をして、一人佇む姿の幻像が浮かんだ。

浮かんだ途端に、ふつりと涙が目から零れた。

横に座る少女が、あまりに珍しそうな姿を晒していることに、服部は心底驚いた。

「え……っ、姉ちゃん、どうしたんやつ……へ……？」

普段クールで、素つ気ない態度ばかりの彼女が、こんな、涙を流すなどと誰が思い至るだろう。

「……彼は……」

「えつ？」

「彼の中は……残酷な悲哀ばかりよ……」

たつた1粒の滴が、その太ももに落ちた。

彼を包むもの（後書き）
(at書き)

今日は短くてすみません。

悲しい遂行

「彼の中は……残酷な悲哀ばかりよ……」

ウエーブのかかった茶髪が、俯いたことで揺れる。

残酷な、悲哀。

その面葉そのままだと想つ。

それを共有したような感覚を身と頭に感じた途端、生理的な涙がこぼれたのだ。

「姉ちゃん……」

「彼は……、もう、元に戻れない……。身体が、もう駄目になってしまったのよ……。本当の、真実は分からぬ……でも……、もう彼は、どんな手も、乞うせない身体になってしまったことを……感じたのよ」

服部は、眼を見開いた。

どんな手も乞うせない身体……

自分自身、考えて至った最悪の推理だったことを、他人の口から聞

くと、余計に卑劣な事実を突き付けられた気分になる。

「……。」

「今私が言ったことに増して、彼はその真実を抱え込んでるのよ……。知ってる……。彼はね、『本当に』辛い時は、誰にでもそのことを語らないのよ……。」

シッティル。

嫌といつぱん知つている。

「……せやな……。……なあ姉ちゃん」

返事はなかつたが、空氣で彼女が言葉の続きを聞いつけていたのが伝わつた。

だから、服部はそのまま言葉を続けよつと、ふと顔に陰を落とした。

「あこつ……ほんまは、誰にも……、誰にも、心開いてへんのやないか……？」

ひゅつといつ音を立てて、無理矢理哀は息を吸い込んだ。そしてしまつぽど、苦しくなつた。

「江戸川コナンになるまでは分からんけど……、少なくとも、幼児化してもうた後は……」

「もし、本当にやうなら、いれぱど悲しことはない。」

元組織の一員であつて、お姉ちゃんを殺害されて、信じられる者などもう生まれないと思っていたこの自分でさえ、今は色々な温かな存在に包まれて、心を開いている人物がそれなりにいる。

彼だつて、その一人だつたのだから。

だが、その彼は、あれほど信頼感を雰囲氣で醸し出しながら、彼自身は誰一人、心を開けていないのだろうか。

だったら何故、周りの人間をあそこまで、必死に守ろうとするのだろうか……。

.....

机上にあるバイブルが振動する携帯。それに驚き蘭は、暇つぶしで読んでいた文庫本から、顔を上げた。

（いきなり振動するから、びっくりしたあ……）

そう感じて、息を吐きながら、携帯を開き【受信メール一件】とされているところから、受信ボックスを開いた。

しかし表示されている送り名を見て、ふいに握っていた携帯を落としそうになつた。

「...新一からだ.....」

今、一番会いたいと願つて いる彼。

そんな彼から、メール。 なんだろうか。

まさか、東都タワーの事件のときみたいに、今やばい事件に関わつて いるからあんまり電話やメールをしないでくれ、とかじやないわよ ね。

たかが1通のメールを開けるのに躊躇うのは、相手が想い人だから だろう。

自分自身を高鳴りから抑えると、メールを開いた。

『 今日夜会いたい。 会えれば、9時ごろに外で。』

うそ…。 じゃあ、新一は帰つてくるの?

嬉しさで滲みそうになる涙を、必死に堪えて、急いで返信した。

大丈夫だよー外つて事務所の下でいいのかな

と、カチカチと早まる心臓の鼓動のリズムに乗るように、キーを押 していく。

会える。 やつと会えるんだ。

電話でもない、写真でもない。

ちゃんと実体として、会うことができるんだ。

嬉しい。

きゅっと携帯を胸に当て、握りしめた。

一方、彼女に送信した張本人はメールを打った後、声に出さず笑つた。

震えが止まらない手で携帯を持ちながら……。必死に計画を遂行するため……。

だつてもう俺は……

決して、止まれない。

悲しい遂行（後書き）

また感想や意見、よろしくお願いいたします。

別れへ好きだよ

【着いた。降りてきて】

いつもと変わりない、ちょっと素つ氣なさのある文面だつたけれど、着いたという内容に、胸を満たされた蘭は、急いで階段を駆け降りた。

もう少し時になつた時間帯。

当然空も、周囲も暗い。1階のポアロも閉店の札をかけていて、電気も付いていない。

それでもそこらにある街灯の明かりが、そこに居る人物を浮き立たせているように見えた。

「……蘭……」

ぽつりと、私の名を呼ぶ彼。

これは正真正銘、彼自身の声だ。

ずっと、ずっと待ち続けてきた、待ち焦がれていた声だ。

ふ、と、柔らかい笑みをこぼす彼。

だけど、その笑みはなぜか、もの寂しげなものだった。

それに、疑問を持ちかけた刹那、温かな腕に包まれていた。

「 しそ、 いち ？」

まるで壊れものを扱うように、優しく抱きしめてくる手。

「 らん 」

一度目と違つて、酷く緩慢な口調で呟きはじめる。

「 い めんな 」

なに ？

「 な なんで、 謝つたりするの？」

待たせたな、とか、 ただいま、とか、 私はそういう言葉を期待してたんだよ？

なのに、 どうして謝つたりなんてするの？

「俺の」と、 ずっと、 待つてて、 くれただろ？

「 うん 」

電話なんかじゃ物足りなかつた。

笑つた顔が、からかつた顔が、得意そつな顔が、ずっと見たかつた。
それが叶つといつ事実が、もつ田前にある。だからそれを、確認し
たかつた。

「やつと……、帰つてきてくれたんでしょう？」

蘭のその言葉に、新一は唇をかみしめていた。

……「めんな……。」めん、……蘭。

「帰つてこれんのは、
今日が、最後なんだ……」

は
?
.....

一瞬田の前が真つ暗になつた。

「おめでこな、もつ、会えねえ……もつ、一度と……」

「……や……やめてよ……。」

ドンと、新一の胸を押し返す。息が荒くなる。心臓がうるさい。

「会えないって何……？」冗談でしょ……？」

彼は、首を縦に振るとしない。

「もはやちえ！」？す」と待てたんだよ！？

少年は、相手の言葉を聞くより、むづくらと瞳を伏せた。

「……どうなは言つてもながなが帰つてこないから……」さく心酔して

： 知つてゐる

一時夕帰してきても
なかなか会えなかつたから
寂しくて

痛いほど、知っている

「やつとつ…会えたんだつて、嬉しかつたのこり…なのこり、それな
のこ…なんでそんなこと無いのうめうつ…」

散々見てきていた。

連絡のない電話を、切なそうに見つめる姿。

姿を見せない自分に対して、文句を言いながらも心配してくれていたところも、全部見てきた。

この行動は、間違っていたのだろうか……

いつそ、永遠に姿など見せず、静かに工藤新一を終えていたら良かつたのだろうか。

そうすれば、ただでさえ安泰な地位になっこいの身体にも負担をかける量を、減らすことができただろう。

そっちの方が…よかつたのか…？

いや、それでも、蘭にはちゃんと新一ともう絶対に会う」と
ができないと告げておくれべきだ。

そうしなければ、蘭は、永遠に、新一を待ち、掛け句には叶わない
望みを持たせ続けてしまつ羽田になるのだから……。

それだけは是が非でも、避けたい」と…。

けど、やはり謝罪の念は溢れ続ける。

「ごめんな…と、何度も言つたつて足りなどしないだろう。

でも、どうしても、工藤新一が死ぬ事実だけは、変えられないんだ。

もつ諦めるしか、俺には方法が……

「また戻つてきてよ新一…」

涙もまじった声の振動が、身体の芯に伝わって来る。

おもりがついたような臉をそっと開ける。

目の前の彼女は、目もとを涙でぐりやぐりにしていた。

胸が痛い。本当にそんな感覚が、身体を突き抜けた気がした。

「……これは、マジで……どうしようもなくって……オメエの期待に何一つ答えられなくて、悪かった」

「つ……」

「「めん」

「……つもつ謝らなくていいつ……」

「……蘭」

ひっく、と嗚咽を出しながら、涙をぼろぼろと、流した。

制御がきかない零は、とめどめなく溢れてくる。

「今までずっと、あつがとう今までずっと、あつがとう

瞬間、呼吸が止まった。吐き切っていた空気もすべて消えた。

その言葉は、生きしく、新一との生活に完全なペースをもつて
こつことに感じられたから。

そして、踵を翻ひつつある彼…。

その彼の腕を必死に掴んで、引きとめた。

そんな新一の顔は、とても穢せがだつた。

「…………もう、ほんとに、会えないんだ……」

「…………あ…………」

「じや……、一つだけ聞いてくれない……？ずっと、聞いたかったことがあるの」

両手で彼の腕を掴む。

聞こえるまで、決して耳を逸らしてほしくない。そう願いをこめて

。

「好きだよ…………新一」

別れ～好きだよ～（後書き）

また意見や感想等よろしくお願いします。

新一の死

するすると重たい足を運びながら、工藤邸の表札がかかつた家の扉を開けた。

度々、発作を起こし悲鳴をあげる心臓を驚撃むようにおさえながら、寝室のベッドに仰向けに倒れこんだ。

身体が熱いのを感じる。

新一は、そつと瞳を伏せた。

「……」

好きだよ……新一。

最後に聞いた蘭の気持ち。あれほど純粋で、真っ直ぐで、嬉しくて、……悲しい告白は、初めて受けた。

目を逸らす余裕など微塵もなかつた。

ただ釘づけになっていたのだ。

言葉を紡ぐ彼女の姿に。

そして、伝わってきた。最後まで、この気持ちを聞いてくれという願いが、響いてきたのだ。

俺が、もじこままこの姿でいられたら……きっとセコには幸せで穏やかな未来があつたのだろう。

だが、そんな作り話、したとて意味などない。蛇足だ。

その時迎えたことしか、本物ではないのだから……。

全く……何をやつてこいるのだろうか。

本来の姿である自分を捨てるなど、最初は思いもつかなかつた未来だろう[。]

全く俺は、奇想天外ばかりの人生を歩んでいるらし[。]

荒い息のまま、苦笑する。

あの言葉を聞いた後、俺はなんて答えたかな……。

いや、何も言わ[。] 確か……確かに……

身体の熱が上がり、朦朧としていく意識の中、鮮明に先ほどの出来事を甦らそつと頭を働かす。

……そうだ。

感謝の意をこめて、抱きしめたんじゃなかつたか……。

それがあいつ、どう受け止めたかな……。

「つすらと田を開け、視線を巡らすと自分を映す鏡を見つめた。

これで、計画の遂行は終了へ近づく。

俺は、工藤新一としての、人生を終える。

本当に元に戻れなくなるといつ実感は、やはりまだ湧ききらない。

だが、怖くはある。

しかし、もういい。

きっと、人間は切羽詰った時、どうしようもなくなつた時は、振り切りやすくなる生き物なのだろう。

「しょうがない」とあつさり切り捨てられる。多分、そうなのだ。

でも、俺にとって、切り捨てなければならぬものは、あまりにも大きすぎやしないのか。

その理由が、どれだけ譲れないものだったとしても

自分を失うのは……なるほど、相当辛いものらしい。

初めて知った。初めて知ったし、これから一度と知ることのない経験だろう。

ああ…………この感覚も、もつ最後か…………。

変形していく己のカラダ。

サヨナラ

工藤新一。

そして

よろしく
ナン。

たつた1人の本物を潰した江戸川口

あと少しだけ…………残りの人生を頼まれくれよ…………。

そして彼は、意識を飛ばした。

衝撃的な涙

目を開けた先に映ったのは、白い天井。

ところが、テザインが施されている天井は、普段と何ひとつ変わらない。

身を起こし、手の内に指を握りこんでみた。

「……小せえなあ……」

この手が、今の俺が『江戸川コナン』の姿であることを悟っている。

ため息を一つつき、ベッドから降りるために足を投げ出すと、なぜか、身体の節々が痛いことに気がついた。

「……」

今まで身体が伸縮した時、こんな痛み別になかったのにな。

……この身体も、どんどんおかしくなってきやがる……。

そつ思つたら苦笑が零れた。

素足のまま、階段を下り、己のサイズに合ひつ服を頭から乱暴に被つた。

「ホホホホ」と痰が気管に引っかかったような咳をすると、鈍痛がする頭を抱えて、家を出た。

…眩しい。

朝か……。服部のやつ、まだここにいるかな。

この前、あいつがこの家に来たとき俺、また話さうって言つたもんな…。

ふつと、溜息とは違う、氣合いに似た息を勢いよく出してみた。

つもう俺はつ…俺のせいで流す涙もつ、無理に笑う姿も
見たくないつ
！

自らが発した言葉を思いだしてみる。

つぐづく馬鹿だね俺も…。

覆い隠すのか、晒すのか、どちらにかしあつ一つの…。

自分自身に呆れる。

苦しきも、辛いも、全て俺だけのものだ。

他人に分かるはずもないし、分からせようとも思えない。

そう思つてはいるはずなのに、それを否定するかのよつこ、蘭や服部や灰原の顔が浮かぶ。

…………あいつらなら、それることもなげに成し遂げたりすんのかも
しれねえな。

そして、ともに戦おうとしてくれるだろう。

あいつらが備え持つ優しさやタフさからなら、考えられない」とで
もない。

でも、俺はそれも許さない。

優しいから。タフだから。

だから？

優しかろうが、タフだろうが、受け止め方の深さに違いがあるうが

事実を知った時のショックは、どんな人間だって変わらない。

まあ、結局は俺のエゴだ。

俺のせいで、流す涙も無理に笑う姿も見たくないという、ただのエ
ゴ。

それに、残り限られた人生くらい

俺の意志で生き抜きたいじゃん…………？

そして再びコナンは咳をした。

「工藤……！」

阿笠邸を出ようとしていた矢先、右田の視界に入った少年の姿に、服部は目を見開いた。

コナンは咳が連續して出てきた所為で苦しかったのか、額に汗をにじませながらこちらを見上げた。

「服部……よかつた。まだ、帰つてなかつたのな……」

「え？」

「話……またするからって言つたからぞ」

そう言つて、微笑むと服部も頷いた。

出てきた阿笠邸にまた戻すのもなんだつたので、大阪に行つたときのように公園へと足を進めた。

「工の辺りに公園なんてあるんか……？」

「あるよ」

人気、あまりないほうがいいよなと呟きズンズン歩く彼に、平次はただついて行くことしか出来なかつた。

そこに行くと、前と違い「ナンま、ブラン」に腰かけた。

服部は、ぎこちない動きでその隣の「ブラン」に同じように座った。

朝だからといつて、元々人気が少ない場所だからだらうか。

ここには誰もいなかつた。

そんなところで「ナン」が風に包まれたのを確認するかのように、ただ座つたまま目を伏せていた。

目を伏せたりして、風を感じてるんか？何を聞いてるんや？

唐突に問いたくなつたけれど、「藤が自分の感覚を確かめているのかもしれない」と感じて、それは出来なかつた。

彼が目を酷く緩慢な動作で開ける。

そこから見えた蒼が、一瞬もの寂しげに見えたのは、俺だけだったのだろうか。

「服部」

「…なんや…？」

「俺な……お前に散々言われてわづづく俺も馬鹿だなって思つたんだよね」

「は？」

ブランコの鎖を握りながら右足を座っている狭い板の上にコツツと乗せた。

「あれだけ言われて俺否定して叫び散らして……もとほと言えば俺が中途半端に本音を晒したのが悪かつたんだよな。ごめんな服部」

「え……工藤何言うつ……

「もつと最初からガツチガチな鉄柵か何かで覆つときや早かつたかな……。中途半端に晒して、中途半端に隠すような真似すっから、お前も気にすんだろ?だから、安心しろよ。もつ俺そんなことやめて……完全に覆い隠せるベールを見つけるから」

「工藤……?」

服部は背中に冷たい汗が伝うのを感じた。

何だ、何を言つてゐる。

「もう絶対お前に無様晒すような事しないから、な、俺成長して、本物のポーカーフェイス見つけっから」

そんな何を考えているかも分からぬ屈託ない笑みを浮かべて、何を淡々と語つているのだ。

「もう心配しなくていいから、だから

もう俺に、構わないでくれ。

「

それを聞いた瞬間。平次の中で何かがぱつりと切れた。

以前感じた腹わた煮えくり返るような怒りでも、叫びたくなる衝動でもない。

これは…………悲しみとこうレシテルが貼られた涙といつも熱。

それが溢れてくる所為で、細められる目。

きつとその熱は、彼に向けられたものだ。

言葉にビリしても表せられない思いが、一筋に伝っている。

あの時の、灰原の想いを身が焼けるような感覚とともに、理解した。

平次を凝視する「コナン」。

あまりにも衝撃的すぎる光景だったんだり。何も言えず、石像のようになに動かなかつた。

そんな2人の間に流れる空気は、鉄の鉛のように冷たく、重い。

そして

「お前…………一体、ビリでそない間違つたんや…………」

紡がれた彼の言葉は、コナンの心を沈降させるものには十分すぎる

重さだった。

衝撃的な涙（後書き）

また感想や意見よろしくお願いします。

最後の真実

「お前…………一体、どうでない間違つたんや…………」

初めて見た服部の涙とともに、唐突に零された言葉。

「…………？」

間違つたって何を…………？

見開かれた瞳が徐々に、また伏せられていく。

分かつてゐじやねえか。

何より、誰より、俺が一番分かつてゐじやねえかよ。

「本物のポーカーフェイスを見つける?・完全に覆い隠せるベールを見つける?・

くだらねえ…………くだらねえよな。

でもな、服部。

もう俺に構わないでくれ

その言葉だけは、本音なんだ。

お前のその涙も優しさから来るものだらう？

お前はマジで、いい奴だよ…………。

だから、もう関わんな。

お前は、大阪の空の下で、あの明るい幼馴染と普通に過ぐして、高校生活送つて、それなりに事件を解決して、自分のやることに満足して、充実した毎日を過ごしてればいいんだよ。

それでいいじゃねえか。

服部。お前はまだ俺から逃げれるんだ。

こんなどうしようもない暗闇を抱えている俺になんて近寄つてどうする。

お前はまだ17だろ？高校生なんだ。

いぐりダチだからって、そこまでして俺に執着しての必要なんかない。

お前には、まだ自由になれる。今なら。

だから…俺が、隠し通していくくなる前に、俺から離れる。

たかが“俺”だろ？そんなたった1人の運命を、お前までそんな重く背負おつとすることしなくていい。

「……服……部……」

服部は涙を止めようと大きく息を吸い込んだ。

それでも、なかなかその霊は止まってくれない。

「今、言つたことは嘘じゃねえ。俺の……本音なんだ。……もう、やめろよ。お前のせつかくの人生を、たかが俺一人のために、無駄にしてどうすんだ。それこそ、ぐだらねえじゃねえか」

「…………」

田の前の少年が、ぎり、と奥歯を噛みしめる音を、コナンは感じた。

「頼む。お前は、お前だろ。お前にとつて俺は赤の他人なんだ。優れた探偵なら、俺の他にもきっとこるさ。ライバルが欲しいならまた探せばいい。だから、他人なんかのために、そこまで苦しむな」

異様に俺の声が、公園に響き渡る。

苦しそうに息を吐いて、ブランコからゆづくりと降りた。降りた余韻で、がしゃがしゃ、と鎌が耳障りな音を立てる。

そしてもう一度、コナンは平次へと向き直った。

「俺、言つたる……。もう、俺のせいで流す涙も、無理に笑うのも見たくないってさ……今でさえ、そんな辛い涙を田の前にしてゐること、これ以上、深いところへお前を連れ込めるわけねえだ……？」

今にも、崩れてぐしゃぐしゃになってしまふやうな顔で言葉を紡いだ。

しかし、その力オを、必死に綻ばせた。

「だつて、オメエは

…………

最後に伝えようつと思つてこいたコトを言いかけた瞬間だつた。

ビくん…………つ！

熱。痛み。吐き気。諸々のモノが、一瞬に身体を襲つた。

刹那、必死に綻ばした顔が、しかめられる。

フラつき崩れそつになつた足を何とか止め、開けていられなくなつた瞳をきつく閉じて、歯を食いしばる。

一気に異常なほど噴き出す汗。先ほど出したのより、数倍激しい咳が
ひ止み。

その光景に驚愕を露わにした服部が、跪き彼に触ると、思わず怯えてしまつほどの鋭さで睨まれた。

「関わるな」

そう伝えられてこるよつな、眼光。

服部は、その光を受けて、絶望に浸された。

そんな彼の姿を視界の片隅でわずかに捉えて、コナン自身も絶望に似た類の光をそつと蒼き瞳に陰らせた。

.....

いつもこうなんだ。肝心な時に、とんでもない邪魔に入る。

激しい咳をするたびに熱くなつていく頭。録画内容が切れ、ザーザーとモザイクだらけになつたビデオテープのように、しかし真っ白になりかけていく思考。

「……………」

そんな状態の俺の耳に、まるで機械のように感情が窺えない平べつ
たい声が届いた。

「…………お前…………死ぬんか…………」

……わつ認めてしまえぱいにかもしれないと思つた。

本物に當つたかったことにれえ、こんな形で遮られてしまつへりにな
ら。

そつなるなじば、もつ最後の『真実』を呑んでしまえば何もかも早
く断つことができるんじやないのか。

しこじいけれど、一度に全ての闇を、手つ取り早くまとめてしまえ
るなり……。

わつこつわ、認めてしまえぱいに……。

〔気持ち悪いほど溢れてくる咳や熱い息を、ゴクリと飲み込む。

崩れかけた姿勢を、ジリジリと持ち直し、顔だけをなんとかその口へと向けた。

すると、何故だらうか。

そんなつもりじゃなかつたのに、唐突に俺は微笑んでいたらしい。

今にも切れそうなほど潤みきつた瞳を和らげて、笑っていた。

そつだよ、と肯定の意を示す代わうのよつて
。

最後の真実（後書き）

また感想等いただけたら幸いです。

潤みきつた瞳で、微笑まれた。

その顔が、自分の言ったことを認められたように感じてしまった。

死ぬのかと問うてしまった。

そんなわけねえだろ？……やついつ答えを期待してた。

けど、こいつは否定すらしなかった。

啞然とした。

何か、言わなければと思つの、口は固まつたように動かない。

先走つた焦りを含んだ吐息が、途切れ途切れに零れるだけだ。

でも、渦巻いた戸惑いだけは止まらない。立て膝からしゃがみ込む。砂のこすれる音がした。

服部がうなだれる姿を田の前にして、コナンはただ謝罪だけを身体の中を巡らしていた。

「めんな、服部。

」めぐ。

ただ微笑んで、呆氣なく認めて、『ごめん。

彼の顔から微笑みは引いていく。その代り、切なげに眉が寄った。

……散々だらう、服部。

ずっと気にかけて、楽しさもたくさんの感情も共有して、ともに事件を解決して、多くの時間を過ごしてきた親友ともいえるライバルに突然、突き放されて関わるなど言われて。

だから、もうやめよう。

いつそ、お前の中から俺なんか消してしまえばいい。

楽に、なればいい。

けじせめて、最後にやつぱりおせつけてほしい。

お前が、吹つ切つて俺など見捨てられるよ！」

ジリ、と一度は関わるな、と黙つて遠ざけた相手に歩み寄つて、その肩に手を置いた。

肩がビクッと震えるも、顔は俯いたままで窺えない。

「お前は、俺と逆の道を行け。俺は……いずれ、……逝くけれど、お前は生きる道を行け。実力に並ぶ者として現れてくれて、たくさんの

樂しかや思こをくれたお前にほ、幸せこ、なつてほしこ……

「 」

やつと肩に置かれた手が放される。

「じやあな」

永遠とこつかの別れを、告げた。

踵を翻しあつてこつてしまづ彼こ、制止の声をかけるじとも叶わなかつた。

流れ続けていた涙が、更に勢いを増して溢れてきたから.....

そして、やつと分かつた。

辛そうにしながらも。ほぐらかしながらも。それでも.....

あいつが、伝えようとしたことは最後の真実だったのだ。

あいつは傷つけまいと、努力して、苦しんで

真実の最後の最後に来る苦しみから俺を遠ざけるために、直前に突き放してきたのだ。

でも……

「…………なんでや、工藤…………」

なんで、そこまでして悲しみを、優しさくと変えるのだ。

ビリヒヒ、自分の精一杯をそんな苦しみに使つんや。

そこまで本気になつて、自分をすたずたに傷つけなあかんほど

人を傷つけるのが怖いんか。涙を見るのが、怖いんか。

とんでもない、究極のアホやないか…………

以前、同じ感情を抱いたことがあつたけれど、今回のはその時よりもずっと濃い。

そうだ……俺は、泣いてるべきじゃない。

泣いてる暇などないのかもしねない。

一分でも、一秒でも、やはり、あいつを早く光へ引きずり込まなけ

れば。

手遅れなどと言わせるものか。

涙を、無理矢理押し込めるように引っ込むと、勢いよく立ちあがつて、先ほどコナンが去つて行った道を駆けて行った。

コナンは歩いていた足が、徐々に早足になり、次第には走っていた。

つい数分前まで、不調を漂わせていた身体だ。息は苦しげに上がり、中の骨も筋肉も、内臓も軋むように痛い。

でも、先ほどから、頭の中で反芻する服部の涙の残像と言葉を、遮りたかったのだ。

それだけじゃない。

さつきの記憶ばかりか、かつて感じた苦しい感覚、嫌な言葉、胸底に閉じ込めてきた諸々の過去が鮮明に甦つてくる。

おめえの旦、逃げたくて堪らないって揺れまくってるぜ

「うるさい…

結局お前は強がつてゐるだけで、せんせのほんまは、誰かに聞いてほしくないやないか……？

「うぬやこ……」

「うるせえだらかす氣なんや……」

「うぬやこ……」

ただでさえ荒れる息は更に、乱れる。

なんでこんな時に、こんなことばかり……。

「うひつて……こつも上手くこかない」とばかりなんだ。

最初、どんな理由があつと真実は告げられないと思つていたはずなに

結局、伝えてしまつた。

何やつてんだよ……。

完璧なんてことはない、俺自身知つてたんぢやないのか。

実際、犯罪者に「この世に完璧なんてねえよ」と言つた」とあります

つたんだ。

それなのに、現在までボテボテな過程を過ぐしながら計画を遂行してきた。

けど……

走り続けていると、誰かにぶつかつた。その衝撃で後ろによろめいた身体を、声を上げて驚き支えてくれた人。

それは、声から見知った人だと分かつた。

しかし、顔は上げられなかつた。そのまま、しゃがみ込み、膝を抱えて頭をうずめた。

「コ、コナン君！？ なんで、こんなところに……って、大丈夫かい！？」

その人物とは高木涉だつた。

突然足にぶつかつてきた人物に目を見開き、驚いた。

ぶつかつたまま、しゃがみ込んでしまつた少年に、そこまで痛かつたのだろうかと不安を感じる。

同じようにしゃがみ込んで、背中に手を当てる。すると、その背中が小刻みに震えているのに気がついた。

「……コナン……君……？」

今まで、ずっと隠し通してきた。

どんなことがあつたと、流すまことしてきた。我慢して、我慢して、耐えてきた。

それくらいのことは、これからも可能だと思ってた。

抑制くらし。
なんでもないと思つてゐた。

でももう、無理だ。

抑えられない!

アーティストとして生きていって、これが俺の選んだ道。

残る時間を大切な奴のために使うということでしたら、まともであれ
る理由がなかつた。

だからそれを、全うしながら生きてきたかつたのに……

なのに、迎えてきた現実は、理想とかけ離れていた。

見る涙を少しでも減らしたかつたのに、それどころか想定外の涙を

増やしてしまった。

辛い時間も丁度してしまった。

泪をじぼすなどとこの行為に全く慣れていない俺は、嗚咽の零し方を知らなかつた。

ただ頬に伝う感触が、生々しくて…小刻みに震えてしまつ肩もどうしようもない。

今までどうしようもないからとこの理由で諦めてきたよつて、今回もそうするしかないらしい。

立つていられないほど辛くなつてしまつた今、もうどういひできる術が見つからない。

歯を食こしづらせるのだからも、強く伏せた瞳からも、何も答へは導き出せそうになつた。

…もつ嫌だ

。

泪（後書き）

一度、全てが消えてしましました。この回。
なので、絶叫しましたが、もう一度書き直しました。
また感想等いただけると、嬉しいです。

足もとで突然しゃがみ込み、顔を伏せて、背中を震わせている少年にどう言葉をかけていいのか分からなかつた。

…………泣いて、いる？

まさか、と驚いてしまつ。

普段、冷静で、とても小学生とは思えないほど頭が切れ、十分に器を持つていてるこの少年が、知り合ひの、それも道端で、涙を流すことがあるのだらうか。

立ちあがることも、顔を上げることもせずに、ただ肩を小刻みに震わせることが…………

いや、そうじやない…………

もしかしたら、いつも、どんなことがあつても平氣だと振る舞つて、笑顔を振りまいて、何でもかんでも抱え込んでしまおうとする少年だから、今こうして泣いているんじやないのか。

泣いてしまつくらいに、今が辛くなつたんじやないのか。

抑制も、我慢も、効かなくなつてしまつたんじやないのか。

だからもうどうしようもなくなつて、ただしやがみ込むしか術を持つなくなつて……。

「ううん、もういい。」少年は、しぶしぶ自分を上手く操れないと悟った。

少なくとも、この涙がおさまるのはだいぶ先になるはずだ。

こんな時、他人の自分にできることと言つたら、人がいないこの道の上で、人の小さな背中を摩ることだつ。

多分、言葉も何もいらない。

今の少年には、ありふれた言葉より何より、背中に伝わる温かい感触の方がずっと、頼りあるものになるだろう。

そう思つた高木は、コナンの震える背中をただただ優しく摩り続けた。

「 つ 」

徐々に零れてくる小さな嗚咽。すんなりそれが出ていくようになら

たのは、背中でゅうべつと動く手の温もりのおかげかもしれない。

それでも、一度糸が切れてしまつた辛さは溢れないとをやめない。

反繻される過去の言葉に、上乗つてくる頭痛と耳鳴り。

内側から何が鈍器で殴られてるかのよつた痛みと、金属音のよつな音。

執拗に纏わりついて離れないのは、忘れたくても忘れられない自分の未来と似ている。

辛い。

知り合いの前でこんな乱れて泣き崩れる姿なんて、死んでも晒したくなかったけど

コントロールも一切効かなくなつてしまつた今では、どう変えることもできないのだ。

もう、認めるしかない。

計画を順序良く遂行できない自分の愚かさも

辛さを全て抱え込んで貫けなかつた己の弱さも

受け入れることしか、できない。

否定したってしきれない。諦めて諦めて、どんどん何かが欠けていく。

もう、何をしたかったのか、誰のためだったのかすら忘れてしまった。

思い出すことすら、可能なのか分からぬ。

成長の欠片もない。

ここまで来て、何が築けた？

何を得てきた？

ナーモ、得テナイ。

俺は何をしたかったんだろう……

意地だとか自分の思いだとか、所々で含みすぎたのだろうか。

俺は、一体何になりたかった。

死ぬ前に、何を成し遂げたかった。

自身に必死に問つても、簡単に答えは出ない。

さつともつ

ヒコロジヤ、ナーニモテキナイ。

....

おととい、新一が最後だと黙つて会いに来たけれど
あの後も散々泣いて、受け入れたことができたけど
でも、やはり心の片隅で信じられないって思つてゐる。

詳しい理由は分からなかつた。

もしかしたら、取り返しのつかないことに漫げこんでしまつたの
かもしけない。

もう、戻つてこれないって分かつてなきやきつとあんな顔で、話してこない。

きっと私に踏ん切りをつけてもいために、わざわざ会いに来ててくれたんだ。

けど、それで、新一はびっくりだ。

新一はいつも周り優先だった。

ホームズ大好きで、推理オタクだったけれど、誰より優しかった。

守つてくれた。

そんな新一は、自分のこともちゃんと考えているのだ。

あのままじゃ、彼は潰れてしまいそうだつた。

思えば、新一が傍にいなくなつた日。その日から、彼にはどこか闇がかかり始めた気がする。

冷静に考えてみれば、彼は分かつた。

同時にコナン君が、家に来て、なぜか度々コナン君を新一と重ねてしまっていた。

一緒にいる幸せの感覚が、そつくりだったから。

それだけじゃない。

心当たりはたくさんあるけれど、やはりコナン君は幸せなんじゃな

いかと疑つてしまつ。

多分、もし、もし、それが事実だつたとしても、驚きはするけれど、わざとすんなり納得できる気がする。

でも、そのコナン君でさえ、最近暗くなつた。

何の証拠も確信もないけれど、私には分かる。

笑つても、普通に話しても、その笑顔に一瞬じばらぐ力がなかつたから……

そして、ぶるりと寒気がした。

彼まで、変に失うハメになつたりしないよね……？

遠距離にいるからとか、そういう単純なものじゃなくて

遙か遠くにいらっしゃう幻像が、頭の中でフリッシュショウした。

これは、『本当に失う』といつ暗示だとこいつよつて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752y/>

何かのために、誰かのために～証～

2011年12月25日15時55分発行